《特　集》

「親日」か「反日」か
――ここ40年の中国指導者達

（法政大学）趙　宏偉

歳月両千玉帛，
春秋八十干戈。

これは40年前，日中国交回復時に，郭沫若氏が創作した漢詩の中の２句であり，今日に至っても鮮明に記憶しているが，その他の句は思い出せない。

日清戦争前後から，1972年まで，ほぼ「八十干戈」であり，それはその前の「歳月両千」と比べてなんと短い「喧嘩期」だろうか，これから新たな「歳月両千玉帛」が始まるんだと当時，両国国民のほとんどはそのように思っていた。1980年代までの中国に対する親近感を持つかの世論調査でほぼ８割の日本人がイエスと答えていたことは，人々の思いを示していた。が，今はほぼ８割の日本人が対中親近感の調査にノーと答えている。

なぜこうなったのだろうか。この短文はその答えを目的としていない。それはできないからである。近年「親日」か「反日」かは，メディアからマスへと常用語化され，外国の指導者や有名人たちがよく色分けされている。このことはなんとなく気になっている。「親日派」には親しみ，「反日派」には嫌悪という思いは，確かに明快でわかりやすい。しかし，それは当てになるだろうか。却って外国認識や自己認識に有害ではないだろうか。とりわけ，ここ40年の中国指導者達が「親日」か「反日」かとよく話題にされてきたので，ここで議論してみよう。

「親日」とされる周恩来と胡耀邦

日本では，共産主義者の中国指導者で周恩来と胡耀邦だけは人気が高い。今でも高く，二人の悪口は聞こえてこない。

周恩来が日本留学経験者だからだろうか。そうでもなさそうだ。周恩来の日本留学歴は短く，すぐに渡欧した。周恩来よりも，蔣介石の方が日本滞在期間も長く，留学のために1906年と07年の２回も来日し，士官学校予科である東京振武学校で学び，卒業し，1911年には新潟駐屯の陸軍第13師団で実習もしていた。しかし，周知の通り，大の親日家であるはずの蔣介石は，政治家として大の親米派と認識され続けている。

周恩来と会っていた日本人たちの語りを読むと，概ね時に夜更けまでの長い時間のお喋りをし，その中で感銘を受けた人格者周恩来といったものが，共通項である。つまり周恩来は日本友人を持つことを悦ぶ性格と人の尊敬を呼ぶ人格が日本人に好まれる所以であり，「親日」と思われ続けたのだろう。

周恩来と比べると，胡耀邦は人格者でもあるが，会っていた日本人達からは胡がとりわけ日本を重視していた姿勢が伝えられている。まだ貧しい中国なのにいきなり日本人青年3000人を招待すると打ち上げ，実行したことは，よく語られ，招待された日本人青年の中に菅直人前首相と野田佳彦現首相の顔もあった。当時の外務省の役人の話によると，胡耀邦は日本人記者をまず会見室に呼んで話をした後，他国の記者を呼び込むことまでした。胡耀邦は日本人が求める人格像に合格し，かつ周恩来同様に日本を特別に重視したことで，今日「親日」と評されるのだろう。

鄧小平は日本を中国の学ぶべきモデルとした指導者だったが，日本で彼が「親日」か「反日」か云々といった議論は聞こえてこない。鄧小平はあまりにも冷徹な指導者で，人間味を出さない鉄血政治家だからだろうか。

同じ理由で毛沢東に対しても「親日」か「反日」かの議論がなかった。ちなみに40年前，毛沢東は田中角栄との会見の席で日本の中国侵略につ

いて「やあやあ，感謝しなくちゃ。おかげでわしは百万もの軍隊ができ，この中国を取ったからだ」といった旨の話をして評価までした。面白いことに，日本の極右たちはさらにこの「毛説」に通じる「毛陰謀説」まで打ち上げた。例の『新しい歴史教科書』第１版は，盧溝橋事変の第１発の銃声を共産党毛沢東の陰謀として書き立てた。いくらなんでも毛を褒めすぎだろう。毛沢東の１つの小さい陰謀で，大日本帝国の敗戦がはじまったとでもいうのだろうか。

「反日」の筆頭とされている江沢民

「親日」か「反日」の常用語化は，およそ1990年代後半から，日中関係が悪化の一途を辿り，江沢民の「反日」が常に議論されている中で出来上がったものである。周恩来，胡耀邦，それに後の胡錦濤と温家宝は「親日」とされているが，江沢民は「反日」の筆頭とされてきた。江沢民の反日物語は次のように綴られている。

10代の時，共産党軍人の父が抗日戦争の中で戦死したために日本を恨み，最高指導者になってから愛国主義教育という名での反日教育を大々的に行い，1998年の訪日中，小渕恵三首相に「謝罪」を強要して拒まれたために激怒した……。

でも，敢えて逆説の物語を綴ってみたらこうもなる。江沢民は資産家の次男坊であり，叔父さんが戦死したことで，娘は二人いるが息子のいない叔父さんの家系を絶やさないために養子に出された。それから自分より11歳上の叔父さんの未亡人という新しい母と二人の妹，それに1949年に結婚させられたこの母親系の従姉，合計４人の女性の献身的な愛を浴びてきた。何よりも重要なのは，1949年からの共産党政権下，江沢民は叔父さんの養子になったことで，強制労働とされるべき資産家の出自という階級区分から，共産党の革命烈士の子女という最高級の階級身分に変わったことである。江は，周恩来の養子で正真正銘の革命烈士の子である李鵬と一緒にソ連留学にまで送られて共産党のエリートコースを歩むことになった。その李鵬は後に江政権の首相や全人代委員長を務めている。まさに毛沢東曰く，日中戦争のおかげだったというわけだ。

江沢民の対日外交は，天皇訪中という歴史を作った。日中２千年史上はじめての天皇訪中であり，それは大成功を収め，日中友好を最頂点に導いた。テレビ画面に映し出された当時の宮澤喜一首相と江沢民の会心の笑みは美しい笑顔だった。

1998年の江沢民訪日の失敗は，天皇訪中の成果を帳消しにしたと言えよう。が，江沢民としては，小渕首相は10月に金大中韓国大統領にはお詫びを行ったのに，翌月の自分には頑として行わず，馬鹿にされたということになる。そんな中でも，さらに後の小泉純一郎政権下，首相の靖国神社参拝が重ねられている中でも，江沢民は自国民に対して「日中関係は成功で良好だ」という公式見解を変えず，小泉首相との会見をも拒否せずに続けていた。

江沢民は中国人の中でも人気が低い。が，欧米では案外評判がいい。江沢民は喜怒哀楽が顔に出る人であり，ハワイでギターを弾きながら歌い出し，歌い終わったら州知事夫人を誘って踊りだした。あの太っ腹を動かしながら。おそらく欧米人からすると，江沢民は人間味があり，自分の言葉で自分の考えを言い，取引できる相手だという評判だろう。ところが，東洋人から見ると，自己顕示，格好悪い，元首らしくない……，要は指導者としては人格の面で不合格だということになる。それに胡耀邦以降，日本を特に重視する中国指導者もいなくなった。とりわけ親米親露の江沢民は日本でも中国でも１つの定評となっている。

「親日」とされていた胡錦濤と温家宝

江沢民の退陣がやっと来たという雰囲気の中，2002年秋から日本の言論界は「親日の胡錦濤」を

大合唱の如くに騒いでいた。そのロジックは戦争経験者世代ではない胡錦濤だから，日本への恨みはないという単純なものだった。

筆者は『胡錦濤』（NHK出版，2003年）を監修し，一人で異議を唱えた。

日本を恨むなら，むしろ胡錦濤の方にはわけがある。国宝級の祖廟を残してくれた先祖の胡宗憲は，明の時代，倭寇との戦争を指揮した兵部尚書（国防相）だった。清末から，茶葉の豪商だった胡家は，日清戦争後，輸出は日本に市場を奪われ，国内市場は戦乱と賠償金のことで疲弊して没落の一途を辿り，後の日中戦争が最後の一撃となって破産した。1942年，胡錦濤は日本に占領された上海の英租界で生まれた。戦乱と貧困の中，母は体が回復せず，胡錦濤7歳の時，他界した。

仮に恨みという線で推測してみると，案の定だと思われるところも多く出てくる。胡錦濤は江沢民が維持し続けてきた「日中関係は良好だ」という公式見解をやめ，小泉首相との会見を拒否した。そして中国国内では大規模な反日デモが複数回行われ，国外では日本の国連常任理事国入りへの反対活動が世界規模に展開された。領土・領海問題では，とりわけ尖閣諸島について，胡錦濤は日本の国有化政策を逆手にとって攻めに転じ，日本の実効支配を崩して日中によるダブル実行支配へ変えていく政策を進めている。

それでも，日本では胡錦濤と温家宝は江沢民という悪役より人気が上である。昨今の薄熙来事件を含めて，日本の世論はおよそ悪いことならその裏に江沢民があったためだ，よいことなら胡錦濤が江沢民に勝ったからだと中国人顔負けの胡錦濤支持を発信し続けてきた。

面白いことに，欧米では胡錦濤は人気が低い。喜怒哀楽は見られず，言葉は公式見解の丸暗記だけであり，自分の言葉で自分の考えを言う人ではなく，取引できる相手ではないというのは，欧米での評判である。とりわけアメリカは胡錦濤にストレスが溜まりすぎたのだろうか，自分の言葉で自分の考えを言いそうだとして，習近平待望論がかなり強い。

まとめ

小稿は決して中国の指導者達について人間的な良し悪し，そして日本に対する良し悪しを議論するものではない。政治学者は政治家を良し悪しで研究するものではない。もちろん欧米で人気が高いからそれでその政治家がよいとも考えていない。

小稿が主張したいのは，外国への態度について「親」か「反」ほど，無意味な形容詞はないということである。周恩来から胡錦濤まで見てきて，彼らに付けた「親日」ないし「反日」の意味は，東洋世界における古き兄貴分の国の元首らしき振る舞い，言わばそういう意味での人格を示してくれたか，おまけに日本を特に重視してくれたかという低次元のものであり，大した根拠もない勝手な思い込みである。

国民国家の現代において，まず自国を「親」「愛」するのは，普通である。中国人はまず中国を愛し，日本人はまず日本を愛するのが当たり前である。第2の郷がある人なら，二つの愛を持つことになるが，それも表現はさまざまである。関心が強いあまり，文句や問題点ばかりを言うこともあるが，それは決して「反日」や「反中」のような単純なものではない。

一国の政治家たる者となると，他国への「愛」や「親」はもうありえない。決して期待できない。一国の政治家は自国の国益を守り，発展させることが職業だからである。そのために彼らは個人的な恨みがあっても肩を組み，恩があっても喧嘩を売るだろう。「親日」と「反日」という言葉，レッテルをやめよう。それは日本の外国認識，日本の自己認識，日本の外交を歪め，国益を損なう観念である。